

慶應 SFC 学会 御中

成果報告書 for ICLC16 in Düsseldorf, Germany

久留生大哉

この成果報告書では、(i)私の発表、(ii)Red Hen Project の resource の使用の許可、(iii) 5 日間の他の研究者の発表について成果を述べる。

(i)私の発表に関して

私の発表は 2 日目で、同時に 14 セッションで発表が行われているため比較的小さな教室であった。しかし、国内外から著名な研究者の方も含め、20 名ほどに来ていただき、非常に有益な機会になった。著名な方を挙げると、国内からは同志社大学の長谷部陽一郎准教授、筑波大学の金谷優准教授、国外からは [Thomas Hoffmann](#) 教授、[Beate Hampe](#) 教授、[Jordan Zlatev](#) 教授に来ていただいた。

発表の後の Q & A セクションでは、multimodal constructions の entrenchment と conventionalization の区別について議論がなされた。Entrenchment は個人の中で表現が構文として記憶に定着することであり、conventionalization は集団の中で表現が慣習化することである。私のデータは TED のプレゼンテーションに基づいており、合計で 407 人が 1092 個のジェスチャーをしているマルチモーダルコーパスを形成している。通例マルチモーダル構文研究は Red Hen Project のリソースを用いて特定の言語・文化集団（多くはアメリカ英語の話者）を対象に行われるが、私の場合は TED Talk に参加している異なる文化的背景を持つ人々で、必ずしも皆が英語を母国語としていないのである。そのため、例えば *again and again* + Cyclic gesture がマルチモーダル構文として定着していると主張しても、例えば手の向きやジェスチャーのサイズの大きさなど、個人間による差が大きく、どのようなレベルでこのパターンがマルチモーダル構文として定着しているかは議論の余地があるということを感じさせられた。そのため、現時点では *again and again* + CYCLE のように、身体的な動作に関してはイメージスキマティックなレベルで表象されていると考えるのが妥当だろうと考えた。

また、the RACs (*back and forth, up and down, in and out*) に関して、それらと共に起る典型的ではないジェスチャーとのパターンを考慮して、マルチモーダル構文スキーマ (the RACs + bidirectional gestures) を提唱したが、それに関しても議論がなされた。例えば、*up and down* と言いながら horizontal bidirectional movement をしているときや、*in and out* と言いながら up-down bidirectional movement をしているときは典型的ではないパターンだが、それらの産出の際に上位のレベルでマルチモーダル構文スキーマが活性化されているかについては議論の余地がある。というのも、例えば上記のような非典型的なパターンの場合、スピーチでは *drove up and down the highway* や *in and out of poverty* と言っており、明らかに概念メタファーや viewpoint など明らかに別の認知操作が働いていると考えられるからである。この際に私のルンド大学の指導教授でもある Zlatev 教授は “Iconicity goes beyond the norms” と言っていたが、その言葉はかなり印象的だった。Iconicity や language norms に

についても今後勉強していく予定である。総じて、今回の発表では世界的に著名な教授たちとの議論に参加することができ、非常に有益な経験になった。しかし同時に、英語力の面でも知識の面でも圧倒されるばかりであったので、これからさらにどちらも向上させる必要性を強く感じた。

(ii) Red Hen Project の resource の使用の許可に関して

(i)で少し述べたが、現在マルチモーダルコミュニケーション研究の世界的な中心は、Mark Turner 教授と Francis Steen 教授が共同代表として行なっている、Red Hen Project である。今回の学会では、Mark Turner 教授をはじめ、Peter Unrig 氏や Irene Mittelberg 教授、Beate Hampe 教授といった Red Hen Project の関係者に直接声をかけ、私の今後のリサーチアイデアについて意見を伺ったり、実際に ELAN のアノテーション画面を見せたりして、コメントを頂いた。その中で、Mark Turner 教授に、これからは Red Hen Project のマルチモーダルコーパスである UCLA Newscape Corpus などのリソースを使用することを許可していただいた。Red Hen Project の resource へのアクセスをいただくことも今回の学会参加の目標の一つだったので、それを達成することができた。これからの私の研究に活かしていきたいと思っている。

(iii) 5日間の他の研究者の発表について

今回私はマルチモーダル研究、ジェスチャー研究を中心に発表を見て行ったが、全体的な傾向としては、今現在欧米ではジェスチャー研究に関しては stance taking, stance stacking の研究が盛んであること、マルチモーダル研究に関しては multimodal syntactic constructions の研究に世界的に著名な研究者たちの関心があることを改めて実感した。私は特に後者に関心があり、今回の発表では Mark Turner 教授、Peter Unrig 氏、Irene Mittelberg 教授、Beate Hampe 教授の共同研究である、there is/are 構文に indexicality の高いジェスチャーが結びつくこと、また Kurt Feyaerts 教授の pointing gesture が統語構造において項の役割を持ち multimodal syntactic construct(ion)s を構成していることに関する研究が特に印象的で示唆に富んでいた。私の修論の研究テーマとして、speech の中で動詞によって喚起されるフレーム要素のうち、実現されていない要素がジェスチャーによって実現されている現象を考えているが、それにより multimodal syntax & semantics について議論を展開し、この現在の世界の潮流に加わりたいと強く感じた。